

一中だより

令和8年5月1日

第3号



作成者：荒川区立第一中学校長 小柴 憲一

「家読(うちどく)取組推進期間」について

荒川区では、ゴールデンウィーク期間、夏季休業期間、冬季休業期間、春季休業期間の年間4回の「家読(うちどく)取組推進期間」を設けています。

この4回に共通しているのは、いずれも子どもたちが家にいる時間が長いということ、家族と会話をする機会が多いということです。

そもそも読書をするには、「様々なジャンルの本を読むことにより語彙力や文章力が養われる」「活字を読んで理解していくことにより想像力が豊かになる」などのほか「教養や知識が身に付く」「生活に役立つ知恵を得られる」などの様々な効果があることが知られています。インターネットなどで検索することによっても知識を得ることができるでしょうが、ストーリー性のある文章の中から得られた知識は「生きて働く知識」となります。

それに加えて、4回の「家読取組推進期間」には2つのねらいがあると考えられます。

1 家庭内のコミュニケーションを知的な場とし、望ましい家庭内環境を構築する

1つは、家庭内の会話の材料を本の内容にすることにより、知的なコミュニケーションの場にするとともに、「共感」「対話」を通して望ましい家庭内環境にすることです。

普段の家庭内の会話は、主に一日のできごとなど、事実を材料にしたものが多く、しかも長い時間をかけられないために、断片的で単発的な会話になりがちです。しかし、休みが続いてお子さんが家にいるときは、比較的まとまった時間をつくることができます。そのようなとき、家族それぞれが異なる行動をするのではなく、顔をつきあわせて何らかのテーマについて会話をするということは、会話自体が知的になるとともに、思春期にあるお子さんだからこそ保護者の方との関係を良好にしていく源となるのです。お子さんが話した本の内容や感想に対して、「そうなんだ」「私も読んだことがあるけど私はこう感じたけどなあ」「その本貸してくれないかな」「じゃ、今度この本を読んでみたらいいんじゃないかな」などの対話をすることは、保護者の方がお子さんを認めることにもなり、子育てにはとても効果的なことです。

2 集団の中にあっても自分の世界に入る技能を養う

もう1つは、集団の中にあっても個の世界に入ることができるようにすることです。

本校でも、朝読書の時間を設定していますが、その時間だけは学級のみながいる中で、誰が何を読んでいるかなど一切気にすることなく、自分が準備した本を読むことに没頭し、一人一人が個の世界に入っています。場面に応じて個の世界に入ることができるという技能のある人は、民衆の風潮に流されずに自分の考えをもとに自分で判断することができる人材になっていきます。当然、自分の信念があるので民衆の同調圧力に屈することもなくなるでしょう。

休みが続いて家族が家にいる日のどこかで、みんなで本を読んでそれぞれが個の世界に入るという時間帯を設けること、あるいは保護者の方はそれぞれ家事をなさっていてもお子さんは一人読書に夢中になることなどは、家族それぞれが互いを尊重することになり、お子さんにとっては保護者の方々から自分自身の存在を肯定的に認められた時間帯になるのです。

思春期になると、保護者との関係よりも友人関係に強い意味を見出し、保護者からの評価よりも仲間同士の評価を意識するようになりますが、それでもお子さんが何かにつまずいたり、困ったりしたときは、保護者の皆様の所に返ってきて、そこがお子さんにとっての居心地の良い場所にならなければなりません。そのような居場所作りのためにも、ぜひゴールデンウィーク期間に家族皆さんで読書をする時間をつくってほしいと思います。

荒川区では平成30年に「読書を愛するまち・あらかわ」を宣言し、令和5年4月1日には「荒川区豊かな心を育む読書のまちづくり条例」を施行しました。

この条例は、これまでの読書活動に関する取組についてさらに発展及び充実させ、「読書を愛するまち・あらかわ」宣言の理念をより一層深めるとともに、区民等及び事業者の読書活動に関する取組を促進し、地域が一体となって、あらゆる世代の区民等が生涯にわたり豊かな心を育む読書のまちづくりを推進していくことを目的に制定された経緯があります。

そこで今回は、読書自体の意義と、家読(うちどく)がもたらす子育てへの効果についてご説明申しあげました。

1年生の自治活動はこれから始まる

今年度、一中では生徒会力を高めることを目的としており、自治組織がしっかりとしてきており、学習・生活上の課題について生徒会組織で目標を立てたり、取組を考えたりして、自治の力で解決を図ろうとしています。

まだ1年生は、例えばある専門委員会で合意形成された取組について学級でプレゼンする場合に、朗読型になってしまい、結果、取組自体も目的を忘れて形式的になってしまいがちです。しかし、上級生になるにつれて、専門委員のプレゼンに「こうしてほしい」という願いがこもっていたりし、取組も目的に向かって活発になっていきます。

1年生は、上級生が活発に自治活動を行っているということにあまり触れる機会がないため、しばらくは教員からの指導に頼ってしまいますが、専門委員会・中央委員会・部活動などで上級生の知的な発言を聞いたり、全校朝礼・生徒会朝礼・避難訓練などで上級生の乱れない動きを見たり、さらには運動会や合唱コンクールなどの全校行事で上級生の団結した雰囲気を感じたりすることにより、次第に1年生の自治活動も活発になり1年生徒会力も向上していきます。

これからは、6月5日開催の生徒総会に向けた学級討議、質問・意見書の作成などに取り組んでいきますが、1年生にとっては初めてのことで、何にどのような質問や意見をしたらいいのか分からないのは当然のことです。しかし、担任等が指導をしながら一生懸命取り組んでいくことになると思います。

そして、生徒総会当日の上級生の発言や本部役員や専門委員長の方針を聞いて、さらに自治活動というのは、自分たちで自分たちの課題を発見し、自発的にその解決について検討して実践することにより、自分たちの学校生活を自分たちでより良くしていくものだとすることを深く理解していくことになるのです。

1年生が一中生になりきっていくことを期待しています。

お知らせ

- 4月29日(水)「昭和の日」に開催された「第40回川の手荒川まつり」に、以下の子どもたちがボランティアとして応募しました。
 - 1年・・・石井 葵、井上 朝陽、宮内 章太郎、寺林 颯杜、森田 響乃、吉田 雛菊
 - 2年・・・小澤 武流、曾羽 美來、高橋 凜、辻 千空桜、中根 章翔、渡邊 萌衣、高本 稜、西田 悠真、伊藤 結心、河城 優生、山本 小遥、芳家 皐
 - 3年・・・安 書瑤、清水 花、浅野 蓮、竹野 鈴音、愛甲 莊介、遠藤 智喜、瀬藤 愛莉、中村 夢萌、森 陽希